

第31回  
インフルエンザ研究者交流の会シンポジウム  
プログラム

会期：2017年6月8日（木）～ 10日（土）

会場：ビネスト 静岡市産学交流センター（ペガサート6・7階）

（〒420-0857 静岡県静岡市葵区御幸町3-21）

会長：鈴木 隆（静岡県立大学 薬学部 生化学分野 教授）

## 【会場】

ペガサート6・7階「ビネスト 静岡市産学交流センター」

URL: <http://www.b-nest.jp/>

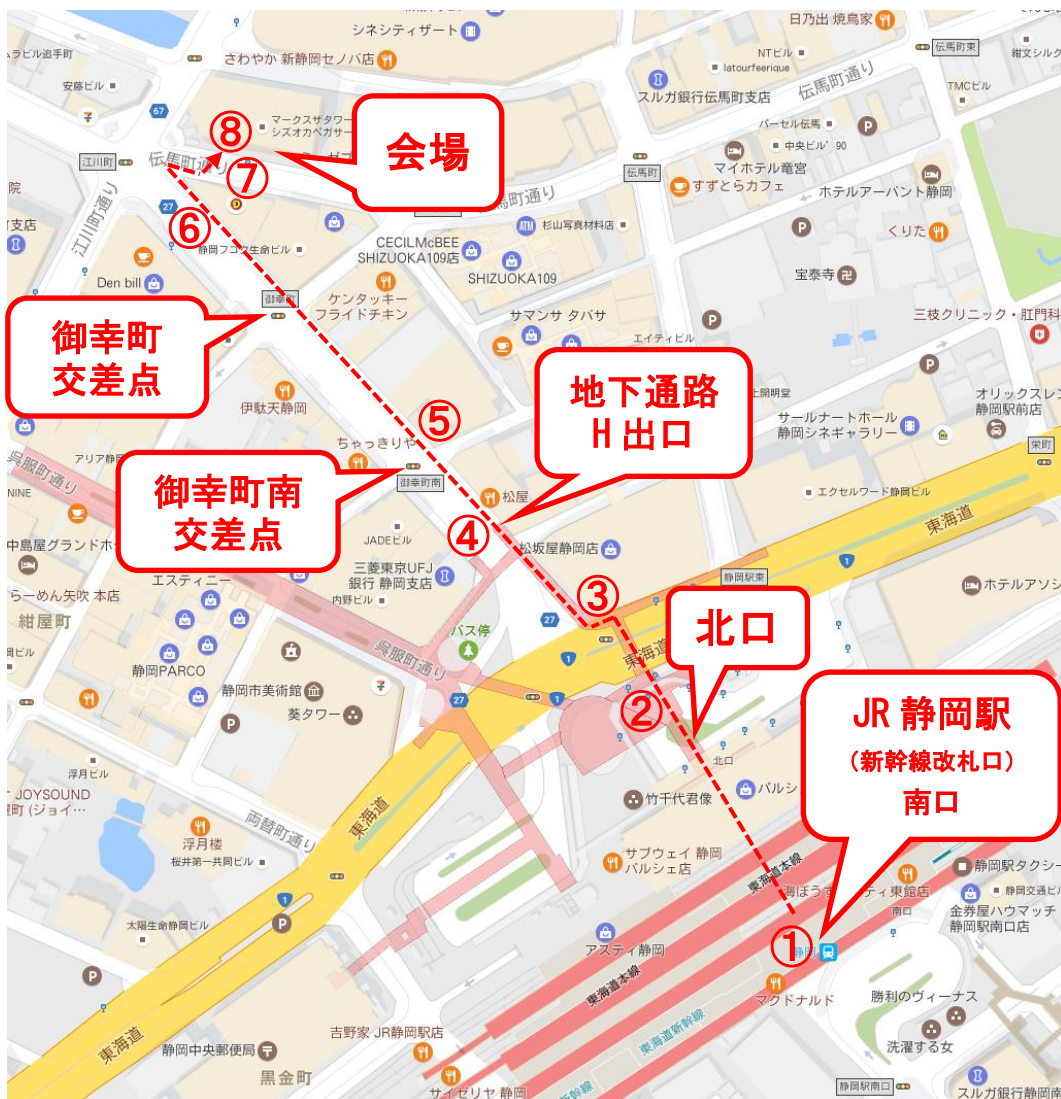
JR 静岡駅から徒歩5分（新静岡セノバ西横）



ペガサート

## 【JR 静岡駅（新幹線改札口）から会場へのアクセス】

- ① 新幹線改札口を出て右側、北口方面へ進む。
- ② 北口手前の地下通路入口へ降りる。
- ③ 地下通路を直進し、「静岡県庁・駿府公園方面」へ進む。
- ④ 地下通路「H 出口」で地上へ向かう。
- ⑤ 「御幸町南」、「御幸町」の交差点を直進する。
- ⑥ デイリーヤマザキと江川地下道の横を右折する（ペガサートが見える）。
- ⑦ 横断歩道を渡り、ペガサート入口へ入る。
- ⑧ エレベーターで 7 階（受付）へ上がる。



## 【会場内案内図】

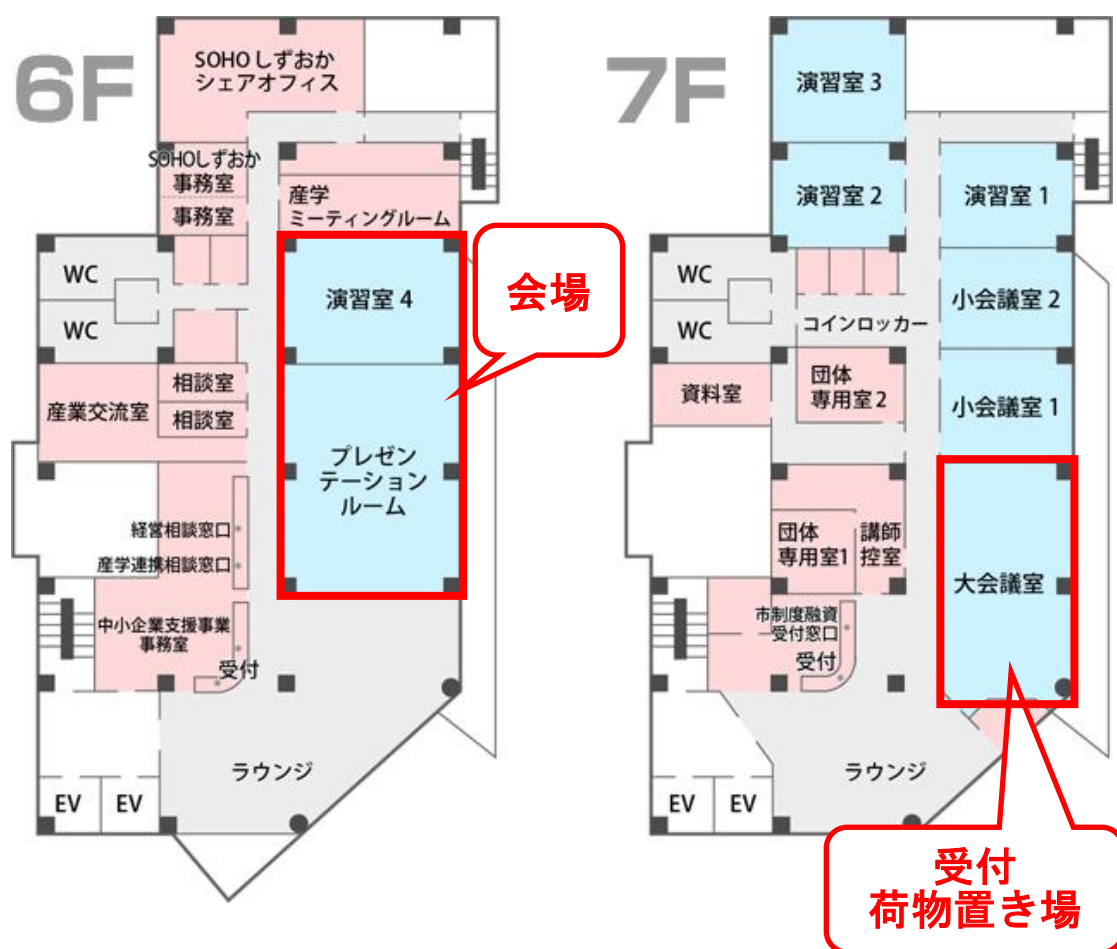
受付：ペガサート 7階 ビネスト大会議室

6月8日（木） 11:30～18:00

6月9日（金） 09:30～19:30

会場：ペガサート 6階

演習室4 + プレゼンテーションルーム



クロークはありません。大きな荷物をお持ちの方は、7階の大会議室を開放しますので、各自の責任でご利用ください。

## 【意見交換会】

日時：6月8日（木）19:00～21:00

会場：中島屋グランドホテル 3階 オリーブ

〒420-0852 静岡県静岡市葵区紺屋町 3-10

<http://www.sn-hotels.com/sgh/>



中島屋グランドホテル

## 【参加者・発表者の皆様へ】

### 参加者の皆様へ

1. ペガサート7階ビネスト大会議室にて受付をお願いします。  
参加費1万円（学生は無料）をお支払ください。  
参加費領収書とネームカードをお渡しします。  
会場内・意見交換会でのネームカード着用をお願いします。
2. 学会場での注意事項  
会場内は禁酒・禁煙です。  
会場内での写真・ビデオ撮影および録音は禁止します。  
会期中の取材は禁止します。  
発表内容の外部への無断引用は禁止します。

### 座長の皆様へ

時間内での進行にご協力ください。

### 発表者の皆様へ

1. 発表時間の厳守をお願いします。  
一般講演：発表10分、質疑応答4分
2. 発表要項
  - ・本シンポジウムで準備するPCは、Windows 10、PowerPoint 2016です。
  - ・スライドサイズは「標準（4:3）」で作成してください。Power Point 2013と2016の既定サイズは「ワイド画面（16:9）」ですので、特にご注意ください。
  - ・動画、専用アプリケーション、またはMacintoshをご使用される場合は、PC本体をご持参ください。また、発表前に担当者にお知らせください。

- ・本シンポジウムでは、ミニ D-Sub15 ピン（オス）のケーブルを用意します。PCによっては本体付属のコネクタが必要な場合がありますので、その場合には必ずご持参ください。

### 3. データの受付

- ・発表用データは USB フラッシュメモリに保存して、休憩時間等に演者席 PC までお持ちください。USB フラッシュメモリは、事前にウイルスチェック駆除ソフトでチェックを行ってください。
- ・PC をお持ち込みの場合は、バックアップ用として USB フラッシュメモリに発表用データを保存してご持参ください。
- ・コピーした発表用データは、シンポジウム終了後に完全に消去いたします。



## 日程表

第1日目：6月8日（木）

11:30～	受付（ペガサート7階 大会議室）
13:00～13:10	開会式（ペガサート6階）
13:10～14:10	一般講演（1）
14:10～14:20	休憩
14:20～15:00	特別講演（東京大学 堀本泰介）
15:00～15:10	休憩
15:10～16:25	一般講演（2）
16:25～16:35	休憩
16:35～18:15	シンポジウム I 「糖鎖とウイルス」
19:00～21:00	意見交換会



第2日目：6月9日（金）

09:30～	受付（ペガサート7階 大会議室）
10:00～12:30	シンポジウム II 「鳥インフルエンザ」
12:30～13:15	昼食
13:15～14:00	特別講演（中部大学 鈴木康夫）
14:00～14:10	休憩
14:10～15:25	一般講演（3）
15:25～15:55	一般講演（4）
15:55～16:15	休憩
16:15～18:00	一般講演（5）
18:00～19:00	夕食
19:00～20:30	一般講演（6）
20:30～21:00	総会・フリーディスカッション

第3日目：6月10日（土）

9:00～14:30 自由討論会

# 特別講演

第1日目 6月8日(木) 14:20~15:00

座長：本郷誠治(山形大学医学部)

「D型インフルエンザウイルス」

堀本泰介(東京大学大学院農学生命科学研究科)

第2日目 6月9日(金) 13:15~14:00

座長：鈴木 隆(静岡県立大学薬学部)

「インフルエンザウイルスとシアル酸」

鈴木康夫(中部大学生命健康科学部)

## シンポジウム

### シンポジウムⅠ 「糖鎖とウイルス」

第1日目 6月8日(木) 16:35~18:15

座長：鈴木 隆（静岡県立大学薬学部）

16:35~17:00

「ムンプスウイルスの細胞侵入機構と糖鎖受容体」

橋口隆生（九州大学大学院医学研究院）

17:00~17:25

「鳥インフルエンザウイルスの糖結合特異性」

日尾野隆大（産業技術総合研究所）

17:25~17:50

「デングウイルス感染と糖鎖認識」

左 一八（会津大学短期大学部食物栄養学科）

17:50~18:15

「インフルエンザウイルス感染とシアル酸分子種」

高橋忠伸（静岡県立大学薬学部）

## シンポジウム II 「鳥インフルエンザ」

第2日目 6月9日（金） 10:00～12:30

座長：喜田 宏（北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター）

西藤岳彦（農研機構動物衛生研究部門）

10:00～10:25

「宿主プロテアーゼ TMPRSS2 とインフルエンザウイルス」

竹田 誠（国立感染症研究所ウイルス第三部）

10:25～10:50

「高病原性鳥インフルエンザ～野生哺乳動物による家禽へのウイルス伝播の可能性」

笛吹達史（鳥取大学農学部）

10:50～11:15

「2016-17 シーズンの家禽における HPAI について」

西藤岳彦（農研機構動物衛生研究部門）

11:15～11:40

「H5N1 鳥インフルエンザウイルスの宿主適応機構」

中屋隆明（京都府立医科大学）

11:40～12:05

「鳥インフルエンザウイルスの哺乳類間伝播機構」

今井正樹（東京大学医科学研究所）

12:05～12:30

「鳥インフルエンザウイルス HA 開裂部位への塩基性アミノ酸挿入機構」

高田礼人（北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター）

## **一般講演**

### **第1日目 6月8日(木)**

13:10～14:10 一般講演(1)

15:10～16:25 一般講演(2)

### **第2日目 6月9日(金)**

14:10～15:25 一般講演(3)

15:25～15:55 一般講演(4)

16:15～18:00 一般講演(5)

19:00～20:30 一般講演(6)

## 第1日目 6月8日(木)

### 13:10~14:10 一般講演(1)

座長: 村木 靖(岩手医科大学医学部)

13:10~13:25

インフルエンザウイルスに対する組換え分泌型多量体 IgA 抗体の作製と性状解析

- 佐野 芳<sup>1</sup>、齊藤慎二<sup>3</sup>、鈴木忠樹<sup>1</sup>、上野智規<sup>2</sup>、多賀祐喜<sup>2</sup>、Elly van Riet<sup>3</sup>、相内 章<sup>1</sup>、田畑耕史郎<sup>1</sup>、藤井 信<sup>1</sup>、高橋宜聖<sup>4</sup>、後藤希代子<sup>2</sup>、長谷川秀樹<sup>1</sup>(<sup>1</sup> 感染研 感染病理部、<sup>2</sup> 株式会社ニッピ、<sup>3</sup> 感染研 インフルエンザ研究センター、<sup>4</sup> 感染研 免疫部)

インフルエンザウイルスへの感染防御を担う分泌型多量体 IgA 抗体の機能の詳細は未だ不明である。組換え分泌型多量体 IgA 抗体を作製する技術を開発し、モノクローナルレベルで機能と性状の解析を行った。

13:25~13:40

インフルエンザウイルスのエピジェネティクス: NP のアセチル化とウイルス RNA 転写活性

- 畠山 大<sup>1</sup>、庄司正樹<sup>1</sup>、山吉誠也<sup>2</sup>、楊 理奈<sup>1</sup>、大海菜穂<sup>1</sup>、竹中志織<sup>1</sup>、齋藤綾香<sup>1</sup>、新垣優美絵<sup>1</sup>、増田麻来<sup>1</sup>、小松嗣典<sup>1</sup>、長野莉奈<sup>1</sup>、中野雅博<sup>3</sup>、野田岳志<sup>3</sup>、河岡義裕<sup>2</sup>、葛原 隆<sup>1</sup>(<sup>1</sup> 徳島文理大・薬・生化学、<sup>2</sup> 東大・医科研・ウイルス感染分野、<sup>3</sup> 京大・ウイルス研)

インフルエンザウイルス NP は「核酸との相互作用」の機能から「ヒストン様タンパク質」と言える。その NP をアセ

チル化する宿主側酵素の発現調節処理をし、それに伴うウイルス RNA 転写量の変化について報告する。

13:40~13:55

鶏卵で継代培養した埼玉株の NA に特徴的に認められたアミノ酸置換

- 桑原朋子 1、高下恵美 1、藤崎誠一郎 1、白倉雅之 1、中村一哉 1、岸田典子 1、高橋 仁 1、秋元未来 1、小川理恵 1、三浦秀佳 1、佐藤 彩 1、菅原裕美 1、鈴木典子 2、渡邊真治 1、小田切孝人 1 (1 感染研、2 埼玉衛研)

我々は鶏卵での継代培養を繰り返しても HA にほとんど変異が入らず、細胞分離株に類似した抗原性を保持している A/Saitama/103/2014 株 (H3N2) を分離した。本株は NA に多数の変異を認めた。

13:55~14:10

トリプシン非要求性細胞株 MDCK (+) における TMPRSS2 の発現

- 坂口剛正、小田康祐、福士雅也、入江 崇 (広島大医)

野間、藤井、吉田らが報告した、トリプシン非要求性にインフルエンザウイルスが増殖する MDCK (+) 細胞 (Arch. Virol., 1998) について、TMPRSS2 の発現とウイルス糖蛋白質開裂活性化などの性状を研究した。



## 15:10～16:25 一般講演（2）

座長：竹田 誠（国立感染症研究所ウイルス第三部）

高田礼人（北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター）

15:10～15:25

小児のインフルエンザ A 患者に対するノイラミニダーゼ阻害剤治療後の抗体動態の検討

○廣津伸夫 1、税所 優 2、長谷川貴大 2、宍戸貴雄 2（1 廣津医院、2 塩野義製薬）

前回のノイラミニダーゼ阻害剤 4 剤の比較におけるウイルス動態と家族内感染率との関連に続き、ウイルス動態が抗体価に及ぼす影響を検討するとともに、感染防御に及ぼす過去の感染既往とワクチン効果について述べる。

15:25～15:40

日本国内で検出された A(H1N1)pdm09 二重耐性変異ウイルスの性状解析

○高下恵美、小川理恵、藤崎誠一郎、白倉雅之、三浦秀佳、中村一哉、岸田典子、桑原朋子、佐藤 彩、秋元未来、渡辺佳世、渡邊真治、小田切孝人（感染研インフル）

2015-16 シーズンに日本国内で免疫抑制患者から検出された H275Y 耐性変異に加えて G147R あるいは I223K 耐性変異をもつ A(H1N1)pdm09 二重耐性変異ウイルスについて、性状解析を行った。

15:40~15:55

B型インフルエンザウイルスに対するセリンプロテアーゼ阻害薬の増殖抑制効果

- 井出杏実 1,2、飯野佑佳 1,2、佐藤 光 2、大宮 卓 2、伊藤洋子 2、磯貝恵美子 1、山谷睦雄 3、西村秀一 2 (1 東北大学大学院 農学研究科 動物微生物学分野、2 仙台医療センターウイルスセンター、3 東北大学大学院 医学系研究科 先進感染症予防学寄付講座)

宿主プロテアーゼの抑制で増殖が抑制できるプロテアーゼ阻害薬がないか、B型インフルエンザウイルスを感染させたヒト呼吸器上皮初代培養細胞で検討し、カモスタットとナファモスタットが有効であることを見出した。

15:55~16:10

インフルエンザ患児の家族内被暴露監護者における血清抗体ならびに細胞性免疫反応経時推移—3年間のまとめ—

- 熊谷卓司 1、中山哲夫 2、奥野良信 3、森川佐依子 4、加瀬哲男 4、迫田義博 5、喜田 宏 6、庵原俊昭 7 (1 くまがい小児科、2 北里生命科学研究科ウイルス感染制御 I、3 阪大微生物病研究会、4 大阪府立公衆衛生研究所、5 北大獣医学部大学院微生物、6 北大人獣共通感染症リサーチセンター、7 国立病院機構三重病院)

インフルエンザ罹患患児の監護者における免疫応答経時推移を2週毎に3回採血して検討した。3年間で78例の検討を行い、57例については細胞性免疫の成績も得たので報告する。

16:10~16:25

2系統のB型インフルエンザウイルスの重感染が疑われた兄弟例

○田中敏博 1、中野貴司 2 (1 静岡厚生病院 小児科、2 川崎医科大学附属川崎病院 小児科)

11歳の兄がインフルエンザB型Victoria系統に、9歳の弟がインフルエンザB型Yamagata系統に罹患し、家庭内で混合して兄弟各々が2系統の重感染となったと考えられる症例を経験した。

## 第2日目 6月9日(金)

### 14:10~15:25 一般講演(3)

座長：西村秀一(仙台医療センターウイルスセンター)

坂口剛正(広島大学大学院医歯薬保健学研究科)

14:10~14:25

繊維状A型インフルエンザウイルスの運動パターン

○塚 立也、齊藤峰輝(川崎医大微生物)

インフルエンザウイルスは、ヘマグルチニンと受容体の結合の交換で運動する能力を持つ。今回、繊維状形態のA型ウイルスの運動を解析した結果、球状ウイルスとは異なる様式の運動を行うことがわかった。

14:25~14:40

インフルエンザウイルスHAと宿主細胞

○五藤秀男(岐阜大応生)

14:40~14:55

TajimaのDを用いたインフルエンザウイルスの基本再生産数の推定

○伊藤公人<sup>1</sup>、キムギヨン<sup>1</sup>、大森亮介<sup>1, 2</sup>(<sup>1</sup>北大人獣センター、<sup>2</sup>JST さきがけ)

病原体の遺伝子配列に関する集団遺伝学手法を用いて、感染症の基本再生産数( $R_0$ )を推定する技術を開発した。病原体の遺伝子配列からTajimaのDを計算し、その時系列変化を計算機シミュレーションから得られるTajimaのDの時系列変化と比較することにより、 $R_0$ を高精度に推定できることを明らかにした。本手法を用いて、2009年のパンデミック時

に、アルゼンチンのブエノスアイレスで収集されたインフルエンザウイルスの塩基配列の Tajima の D の値を調べた結果、基本再生産数  $R_0$  は 1.55 (95%信頼区間 : 1.31~2.05) と推定された

14:55~15:10

C 型インフルエンザウイルス NS1 タンパク質の核外移行シグナルの解析

○下平義隆 1、後藤崇成 1、松寄葉子 1、村木 靖 2、菅原勘悦 1、本郷誠治 1 (1 山形大・医・感染症、2 岩手医大・医・微生物)

我々は、これまでに C 型インフルエンザウイルスの NS1 の 109 から 126 位の領域が核外移行に関与することを報告した。今回はこの領域のアミノ酸に変異を導入し、核外移行に重要なアミノ酸を明らかにした。

15:10~15:25

C 型インフルエンザウイルス HE タンパクの開裂に関わる宿主プロテアーゼの解析

○佐藤 光 1, 2、林日出喜 3、下平義隆 4、山谷睦雄 5、本郷誠治 4、川上和義 2、西村秀一 1 (1 仙台医療センターウイルスセンター、2 東北大医感染分子病態解析学分野、3 長崎大医研究高度化支援室、4 山形大医感染症学講座、5 東北大医先進感染症予防学寄附講座)

C 型インフルエンザウイルスが感染性を有するためには、膜蛋白質 HE が開裂することが必須である。本研究では宿主プロテアーゼ TMPRSS2 および HAT が、その開裂に関与しているかどうか検討した。

## 15:25～15:55 一般講演（4）

座長：西村秀一（仙台医療センターウイルスセンター）

坂口剛正（広島大学大学院医歯薬保健学研究科）

15:25～15:40

3型パラインフルエンザウイルスに対する種々のセリンプロテアーゼ阻害薬の増殖抑制効果の検討

- 飯野佑佳<sup>1, 2</sup>、井出杏実<sup>1, 2</sup>、佐藤 光<sup>1</sup>、渡邊王志<sup>1</sup>、磯貝恵美子<sup>2</sup>、山谷睦雄<sup>3</sup>、西村秀一<sup>1</sup>（<sup>1</sup>仙台医療センター ウイルスセンター、<sup>2</sup>東北大農 動物微生物学分野、<sup>3</sup>東北大医 先進感染症予防学寄附講座）

宿主の蛋白分解酵素で感染性を獲得する3型パラインフルエンザウイルスの増殖を、臨床で肺炎治療などに使われている種々のセリンプロテアーゼ阻害薬が抑制するか否か、ヒト気管上皮初代細胞の系で検討した。

15:40～15:55

ヒトパラインフルエンザウイルスの糖鎖認識特異性の解析

- 大嶽 瞳、紅林佑希、福島圭穰、高橋忠伸、鈴木 隆（静岡県大薬）

シアロ糖鎖に対する認識特異性の異なるヒトパラインフルエンザ1型ウイルスおよび3型ウイルスを用いて、糖鎖末端を人工的に改変させた赤血球および細胞に対する結合性・感染性を検討し、糖鎖認識特異性を規定する分子機構の解析を行った。

## 16:15～18:00 一般講演（5）

座長：西藤岳彦（農研機構動物衛生研究部門）

齋藤玲子（新潟大学大学院医歯学総合研究科）

16:15～16:30

インフルエンザウイルスを吸着濃縮可能な糖鎖プローブの開発

- 尾形 慎 1、山内紀子 1、大坪忠宗 2、池田 潔 2、加藤竜也 3、  
朴龍洙 3、山中隆史 4、左 一八 5（1 福島高専、2 広島国際大、3  
静岡大、4JRA、5 会津大）

二つの主要なシアル酸である Neu5Ac 及び Neu5Gc を一分子中に多数持つ糖鎖プローブの合成に成功した。これら糖鎖プローブに対するインフルエンザウイルスの吸着特性、さらにはウイルス濃縮技術について紹介する。

16:30～16:45

Direct real-time RT-LAMP 法を用いた multiplex POC 検査法の開発と地域感染症リアルタイムサーベイランスへの応用

- 大場邦弘 1、木屋啓一 2、齊藤慎二 3、高山郁代 3、高橋 仁 3、中内美名 3、仙波晶平 4、米川俊広 4、瀬川雄司 4、渡辺英俊 4、納富継宣 4、影山 努 3（1 公立昭和病院、2 西東京中央総合病院、3 感染研インフルエンザウイルス研究センター、4 栄研化学株式会社）

Direct real-time RT-LAMP 法とマルチウェル搭載マイクロ流路チップを組み合わせた迅速・簡便な呼吸器感染症ウイルスの遺伝子検査法を構築し、インフルエンザ等のリアルタイム病原体サーベイランスへの利用について検討した。



16:45~17:00

日本におけるヒトインフルエンザ B の流行予測

- 大森亮介 1、Mayumbo Nyirenda<sup>2</sup>、伊藤公人 1（1 北大人獣センター、2 北大情報）

インフルエンザ B の山形系統とビクトリア系統の報告者数データから、それぞれの系統の伝搬率の季節性、再感染に対する抵抗性、系統間の流行干渉を推定し、どちらの系統が主な流行系統となるかを予測した。

17:00~17:15

海外から持ち込まれた未加熱家きん肉等から分離された鳥インフルエンザウイルスの性状解析

- 柴田明弘 1、日尾野隆大 2、福原久江 1、住吉理穂 1、大河原彩子 2、松野啓太 2、岡松正敏 2、尾坂優之 1、迫田義博 2（1 動検、2 北大）

海外から持ち込まれた家きん肉等から高病原性を含む鳥インフルエンザウイルスを分離したため、その性状解析の結果について報告する。

17:15~17:30

2015-16 シーズンの C 型インフルエンザの流行

- 松寄葉子 1、下平義隆 1、本郷誠治 1、水田克巳 2、西村秀一 3（1 山形大、2 山形衛研、3 仙台医療センター）

2015 年 12 月から 2016 年 5 月の山形県で、35 株の C 型インフルエンザウイルスが分離された。2014 年のサンパウロ系統と神奈川系統による同時流行とは異なり、サンパウロ系統単独による流行であった。

17:30~17:45

茨城県の野鳥由来 H5N6 亜型 HPAIV の分子進化解析

○常國良太、竹前喜洋、内田裕子、谷川太一郎、峯 淳貴、西藤岳彦（農研機構動衛研）

2016 から 2017 年にかけて分離された H5N6 亜型野鳥由来株について、MCMC 法により時系列データに基づく分子進化系統樹を作製し、SPREAD 法により茨城県内における野鳥での拡散を視覚化した。

17:45~18:00

2016/17 シーズンに流行した AH3 型ウイルスにおける HA 遺伝子の多様性

○川上千春、清水耕平、小澤広規、百木智子、七種美和子、宇宿秀三、笹尾忠由（横浜市衛研）

2016/17 シーズンのインフルエンザは AH3 型ウイルスが流行の主体で、HA 遺伝子系統樹上ではすべてクレード 3C. 2a に属し、さらに N171K、I406V、G484E 変異を持つ（サブクレード 3C. 2a1）が約半数を占めた。このうち、同一患者で 3C. 2a1 と N31S、D53N、R142G、S144R、I192T、Q197H 変異を持つウイルスを分離したので解析を行った。

## 19:00～20:30 一般講演（6）

座長：迫田義博（北海道大学大学院獣医学研究院）

板村繁之（国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター）

19:00～19:15

ヒト由来マクロファージ様細胞の活性化能に基づくインフルエンザワクチンの免疫原性定量法の構築

佐藤佳代子、浅沼秀樹、小田切孝人、田代真人、○板村繁之（国立感染症研インフルセンター）

パンデミック発生時にワクチンの力価を、生物学的活性として迅速に測定できる方法の開発は重要である。全粒子ワクチンの免疫原性と相関するヒト由来マクロファージ様細胞を用いた試験法を開発したので報告する。

19:15～19:30

ワクチン接種とサイトカイン産生能

○中山哲夫 1、熊谷卓司 2、瀬瀬律子 3、菅 秀 4（1 北里生命科学研究所、2 くまがい小児科、3 阪大微生物病研究所、4 国立三重病院）

スプリットワクチン接種後サイトカイン産生能を検討し抗体応答を認めた群では1回接種1か月のリンパ球はTh1、Th2、IL-8、G-CSFを産生し、抗体応答陰性群ではサイトカイン産生は認めなかった。

19:30～19:45

2015-2016年シーズン Test negative case control designによる  
インフルエンザ4価不活化ワクチンの効果

○齋藤玲子 1、八神 錬 1、日比野亮信 1、佐藤 勇 2、川島 崇  
2、木村眞司 2、幸道直樹 2、真崎宏則 2、小野靖彦 2、麻生憲史  
2、田邊郁望 1、小田切崇 1、菖蒲川由郷 1 (1 新潟大医国際保  
健、2 インフルエンザ調査グループ)

5道府県で778名を調査し、A/H1pdmのワクチン効果は  
4.3% (-30.0~29.4%)、B山形は46.2% (16.0~65.5%)、  
Bビクトリアは-1.0% (-54.0~33.5%)であった。

19:45～20:00

皮内溶解型マイクロニードルを用いた貼るインフルエンザワクチン  
の効果 -H5亜型ウイルスに対するワクチンの試製とその効果-

○迫田義博 1、中務陽裕 1, 2、来馬浩二 2、下野浩貴 2、鈴木瑞穂  
1、日尾野隆大 1、松野啓太 1、岡松正敏 1、喜田 宏 1、小山田  
孝嘉 2 (1 北大獣医、2 富士フィルム)

皮内溶解型マイクロニードルにH1抗原を封入した、貼る  
ワクチンの効果をマウスで評価した(昨年の本会)。本年  
は、H5抗原を封入した貼るワクチンを試製し、その効果をマ  
ウスを用いた攻撃試験で評価した。

20:00～20:15

皮下ワクチンおよび経鼻ワクチンにより誘導された抗体応答の比較

○相内 章 1、鈴木忠樹 1、川口 晶 1、池田千将 1、泉地恭輔 1、岸田典子 2、浅沼秀樹 2、渡邊真治 2、田村慎一 1、小田切孝人 2、田代真人 2、長谷川秀樹 1 (1 国立感染症研究所 感染病理部)

皮下ワクチン接種者および経鼻ワクチン接種者において、血清ならびに鼻腔粘膜上に誘導された A(H3) ワクチン製造株あるいはその野外株に対する中和抗体応答を比較した。

20:15～20:30

インフルエンザワクチン

○喜田 宏 (北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター)

1. 鳥インフルエンザワクチンの誤用が鳥インフルエンザの猖獗を招いた。
2. パンデミックインフルエンザ対策の基盤は季節性インフルエンザワクチンの抜本改良にある。